＜第３号＞

緑のかけはし

仙台市青葉区堤通
雨宮町１番１号
（〒981-8555）
東北大学農学部
国際交流委員会
No.3 March. 1998

International Communication for Division of Agriculture (ICDA)

快適な留学生活に向けて

留学生担当教官　伊藤房雄

世界でも希有な長寿社会を迎えた日本では、高齢者がいかに痴呆症（いわゆるボケ）にならずに老後を過ごせるかということが重要な社会問題のひとつになっています。この問題に関連して先日、ある先生からボケ防止対策のお話を伺いました。その先生は、ボケ防止には「三かく」が効果的であるとおっしゃいました。すなわち、「恥をかく」「汗をかく」「文をかく」という「三かく」です。第一の「恥をかく」とは常日頃多くの人々とコミュニケーションをとり、自分自身の好奇心を失わせないようにすることです。第二の「汗をかく」とは文字通り、日常的に身体を動かし肉体的な老化を抑制することです。そして第三の「文をかく」とは、手紙を書くなど指先を動かし脳を活性化させることです。

この話を聞きながら、ボケ防止の「三かく」とは実は留学生活を充実させる３ケ条でもあることに気がつきました。例えば、留学の目標である学位を取得するためには指導教官と頻繁に議論し、新しい知識を修得しながら論文を書かなければなりません。また健康を維持するためにはスポーツで汗をかくことも必要ですし、日本の生活様式に馴れるためには学校外の人々と積極的にコミュニケートすることも必要です。

確かに留学生活は大変です。見ず知らずの国での生活様式や研究スタイルに戸惑い、ストレスを溜め、心身に変調をきたす人も少なくありません。そして、彼らの中には専門医の治療を必要としている人もいます。しかし、本当に留学生活の悩みを解決するためには、これまで述べてきた「恥をかく」「汗をかく」「文をかく」ことが最善であると私は思います。

ただし、「恥をかく」「汗をかく」「文をかく」ためには、それを実行できる環境が整備されていなければなりません。もし皆さんが常日頃、農学部の中で「恥をかく」「汗をかく」「文をかく」ための設備やシステムに不満を感じているならば、躊躇せずわれわれ国際交流委員会や教務掛に申し出て下さい。そのような研究・生活環境の不備を解消することも、われわれの使命なのですから。

農学部
附属施設見学の実施

農学部では毎年，留学生を対象として附属施設の見学旅行を実施しています。平成９年度は，女川にある附属海洋生物資源教育研究センターの見学を平成９年11月６日に行いました。また，女川原子力発電所ＰＲセンターの見学も併せて行いました。

以下は参加者の感想です。

劉 灶 長

Thanks to the careful organization of the International Exchange Committee. I think the school excursion for foreign students to the Affiliated Ocean Biology Resource Education Center and Onagawa Nuclear Power Station Public Relation Center was very succeeded. I enjoyed this kind of travel. Especially the visit to the Ocean Center is beneficial to our study. It let me know that the inter-major research is possible. Sometimes I feel that some experiment is not possible to carry out in my laboratory. And I hope I can do it at other laboratory of the same Faculty. If there is a chance I would like to know more about the common facilities.

I am also glad to get a little bit knowledge about the safe utilization of nuclear power to the civil construction. Of course, I hope we can get better ways to get ride of the nuclear waste as soon as possible.

Form LIU Zaochang

史 清 文

Two weeks ago, I, as a foreigner student, visited the Education and Research Center of Marine Bio-resources attached to Faculty of Agriculture. That was the second time I went out of the campus to visit the subsidiary facilities of Faculty of Agriculture. After about two hours traving on the bus, we got to the destination. Through the introduction of Prof. Kijima, we got known the history, development and facilities of that center. The stuff of the center also took us go for a sail on the practicing boat of the center, Mr.Yoshino took some pictures when we wearing the life jacket got off the boat as a souvenir.On the returning way, we also visited the Onagawa Nuclear Power Public Relation Center. After 30 min spiralling up the mountain, we got to the Nuclear Power PR Center, which was a very modernized installation. Recent year, nucler power stations were also builted in our country, but I always worry about the garbage disposal of nuclear fuel and the safety, after that visiting, my worry vanished.

Through this time and last year's visiting to the Farm of the Faculty of Agricultuer, I have a full understanding to our faculty, this is necessary, I think, for me and all students studying at this faculty. Finally, I want to thank the Faculty of Agriculture to proved this chance for us.

プラサ パステン グィド

It was very important and interesting to have visited the Education and Research Center of Marine Bio-resourcus, due I will develop some of my technical activities in that place. I think that Center has a very good location allowing carry out as much researches at protected areas as exposed rocky areas. Likewise, in Onagawa Nuclear Power Public Relation Center I admired as Japan has been able to combine high Technological development with an efficiently urbanization.

Finally I want to express my gratefulness for your invitation.

Sincerely yours

Guido Plaza

李 天 来

11月６日に私たちは佐藤英明先生をはじめ、関係の先生や教務掛の方々に連れられまして、農学部附属海洋生物資源教育研究センターと女川原子力発電所ＰＲセンターを見学してきました。

海洋生物資源でも原子力発電でも私の研究分野にかなり違うのですが、それのいずれも人間に対してなくてはならない食品とエネルギーとなるもので今や世界で大きい課題になっていることで、私の関心を引きました。今まで我々は陸上の生物資源や数万年も経って溜まっていた石油、石炭などのエネルギーをよく開発してきましたが、どうもいまに食品やエネルギーの不足が出てくると思われます。ということは地球上の人口は毎年8000～9000万人が増えてきていて、耕地は増加できなくなるだけでなく、環境、水源、砂漠化並びに発展途上国の工業化によりどんどん減少し、石油や石炭はあと何十年や何百年間しか利用できないことと言われています。それなので、海洋生物資源が昔から開発されてきましたがこれからもっと広い海洋の生物資源をよく保護し、開発し、更に利用しなければならないと思っています。またエネルギーについても新しいエネルギー源を開発しなければならないことになっています。今の原子力発電に反対する人がかなり

いますが、それも確かに放射線の汚染の恐れがありますが、どの新しい技術でも負作用もありますから、それを全部利用しないと、今の世界はどうなりますか。だから反対するよりもむしろ積極的に研究し、利用しながらその欠点を除いた方がいいと思っています。

李西茜

私は今年９月に中国新疆喀什から日本に来ました。今回農学部国際交流委員会の勧めで、11月６日に農学部附属海洋生物資源教育研究センターと女川原子力発電所ＰＲセンターへ見学に行きました。

留学生たちが一緒に話をしたり、見学したり、食事をしたり、とても楽しい一日を過ごしました。農学部附属海洋生物資源教育研究センターの研究施設を見学してから実習船に乗りました。砂漠で育った私にとっては非常に嬉しい体験でした。また、女川原子力発電所ＰＲセンターの見学では原子力発電廃棄物の処理が心配でしたが管理者に「環境汚染の問題は絶対ありません」と言われて、私も安心しました。今度の見学では留学生間の親睦を深めると同時に、いろいろな知識を吸収しました。ただし、参加した留学生が少ないことが残念でした。また、見学のチャンスがあれば沢山の留学生と一緒に参加したいと思います。

留学生 オリエンテーション実施

平成９年12月15日に留学生オリエンテーションを開催しました。

このなかで、緑のかけはし第２号（1997年11月発行）の「教官の留学体験記」でも記事を寄せていただいた動物生産科学講座助手の篠原久先生と平成10年３月に学位を取得し、修了された食品機能学講座Ｄ３の徐還淑さんに留学生活をテーマとした特別講演をしていただきました。

また、オリエンテーション終了後、指導教官、日本人チューターと一緒に懇親会を開催しました。以下は、特別講演の要旨です。（なお、篠原先生には「教官の留学体験記」に掲載済の内容で講演をお願いしましたので、要旨の掲載は割愛させていただきます。）

＜私の思ったこと＞

農学部　食品機能学講座　徐 還 淑

私が未経験で未知の世界に飛び込んでから、いろいろな期待と喜びがありました。まず、生き生きと希望に燃えた留学生活を送るためには健康であることが大切であります。つぎに、よき友を、よき先輩をもつことが誇るべき宝で、至上の幸運であります。また、一人で悩まず先輩、友人にもどんどん相談すれば、解決方法を見出せるヒントがあたえられます。最後に、人生にあって、最大の幸福は、生涯の師を持つことであり、師を持たぬ人生ほど不幸なことはありません。どんな有名人となり、成功者となっても師なき人生はさびしいものであります。

日本の楽しい、いろいろな文化や習慣を経験し、みんなと仲よくやっていこう。これこそが留学の大きい意義の一つだと思います。そして、二度と来ない留学時代の歴史を、人生行路を思い出を美しく刻んでゆけるような、悔いのない留学生活を過ごしてください。思いきり活動しきってゆく人こそ、美しくて幸運のつかめる人であります。

卒業しました。嬉しいです。私を終始御指導してくださった先生に、心から感謝の意を表します。実験やとりまとめに何かと援助をいただいた食品機能学講座の職員、大学院生をはじめとする皆様に深く感謝いたします。

平成９年度
農学研究科修了生から

平成９年度、農学研究科では、博士課程前期２年の課程で６名、後期３年の課程で４名の留学生が修了されました。

修了後帰国された留学生からコメントを寄せていただいたので以下に紹介します。

劉　思陽

日本に来てから３年半が経ちました。そろそろ学校を別れる時になり、日本にいた留学生活を振り返り、最初の来日の目的を達成したかと考えればいろいろ思い出があります。

「百聞は一見に如かず」(Seeing is believing)。日本の先進的な科学と技術を学びたい、日本的伝統と文化を了解したい、二つの動機を持つ私は仙台に着いた日からの三年半に、日曜日と祝日を除き、ほとんど毎日学校に通っていました。一生懸命に実験をやって、データを整理して、論文を投稿して、ついに無事に博士学位がとれるようになりましたが、どうしてもまだ、やりたいことがありますし、遺憾なことが残っています。もし自分の好きな、博士論文以外の分野と実験もやれれば、もっと成果になると期待できるし、もし農学研究科で留学生と日本人学生の間に定期に研究発表会を開くことができれば、(あるいは、一緒にお花見をしたり紅葉を見に行ったりできれば)、学問への考え方などのいろいろの面で深く交流することができると思います。

先号の緑のかけはしに佐藤英明先生が書いたとおり、日本に留学してよかったと思っていましたが、もっと留学生の要求と困難を考えてくれればよかったと思います。当然、留学生自身も積極的に自分の要望と期待をはっきり言い出し、しかも、自分の努力を通じて活発に研究生活を送ることが重要です。

Chaudhry. Zubead

My impression about Japan is similar as the most foreign student had. But especially being an agricultural research student, my idea about the research level here is enough to compete the world standard. Although Japan is not an agricultural land, but I think Japan can be a trendsetter of the modern agricutural techniques. As a matter of fact, that Japan is an industrial country and the most of the food material is being imported from other contries, hence it is required to improve the existing facilities. The need is only the application of the modern techniques which are well established in Japan. The application of new technology will boost the agricultural status and it is only possible, when the Japanese scientist be well aware of the world agricultural problems. The requirement is only, the exchange of communication with the other countries for the future requirements and practically implementing the rapid advances at the molecular and genetic levels; which Japan have an edge. The number of foreign researchers in agricultural departments is still not enough, there is a need to promote the agricultural research exchange programs with those countries which have similar agricultural environments. It is also important that Japan should send his researchers to these countries. With this idea, when the people will go back to their respective countries with having a hand in modern technology, automatically the agricultural quatity will mutually improve and Japan will be reknown as a trendsetter of 21st century agricultural technology.

I think that the Japanese are regular and hard worker, and they have disciplined manners even from Lab to entertainments. This is enough for some one to carry the research activities to some where.